様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　３日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２０１０　～　２０１２
課題番号：２２５２００４１

研究課題名（和文）宋代士大夫の経書解釈に関する研究―新発見の紙背文献の解読・復元を通して

研究課題名（英文）Research on Interpretation of Books of Classical Studies by Scholar-bureaucrats in the Song Dynasty

研究代表者
井澤　耕一　　（ＫＯＩＣＨＩ　ＩＺＡＷＡ）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：００４５５９０８

研究成果の概要（和文）：
本研究の成果は以下の三つに大別できる。
第一に、PHOTOSHOP を使用した画像解析および上海図書館に赴いての実見によって、当図書館蔵の紙背文献である陳堯道『大学』『中庸』五注を解読した。さらにその成果を、2011 年、第 2 回朱子学国際学術シンポジウム（白鹿洞書院）、2012 年、第 3 回朱子学国際学術シンポジウム（岳麓書院）および日本中国学会第 64 回大会（大阪市立大学）において発表した。
第二に、地方志や書誌目録、個人文集などに拠って、紙背文献の著者である陳堯道個人の事績およびその家系を調査した。その結果、陳堯道とその一族は、地方官僚のみならず、経学者としても功績があったことが明らかとなった。
第三に、五注および地方志の調査によって、陳堯道が『大学』『中庸』五注を作成した動機を解明した。今回発見した五注の序には、陳堯道は 1247 年から 3 年間、南安軍(江西省贛州市大余県)軍学教授に就任し、その際学生の求めに応じて五注を作成した、と記されている。当時南安軍は朱子学盛行の地として知られており、以上を踏まえて、陳堯道が五注を作成したのは、道学を信奉する学生の要請がきっかけであったという結論を導き出した。

研究成果の概要（英文）：
The results of this research are roughly divided into three parts:
The first ,through personal analysis and by using PHOTOSHOP , I deciphered Chen　Yaodao (陳堯道)’s five notes on 大學　and 中庸.　Later, three papers were given at the International Academic Meeting on Neo-Confucianism held in Nanchang University(2011) and Hunan University(2012) ,and The Sinological Society of Japan held in Osaka City University(2012).
The second part involved a detailed investigation of Chen’s life and his family line, I found that Chen and his clan were not only local bureaucrats but also brilliant scholars.
The third, from deciphering of these notes, I elucidated the reason why Chen had written them. From 1247 to1249, he was a professor of a government school in Nan’an 南安, and wrote manuscripts on five notes of 大學 and 中庸 at the request of students. At that time,Hengpu was well known as the place where Neo-Confucianism was flourishing, and it therefore is logical for Chen to accepted the students’ request.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：儒教、四書

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究で主題となる「宋代士大夫」は、いわゆるエリートとして社会を領導する責任感を持ち、理想的社会を実現するため、自己の思想言説を「著述」という形で表現した。その一つとして古代の聖人の言行を記した典籍、すなわち「経書」に対して独自の注釈を作成することが、北宋以降、彼らによって行われたのである。北宋においては、王安石（1021－86）が、『注疏』を下敷きにしつつ、自らの思想を注入した『三経義』を作成し、南宋では、朱熹により『四書章句集注』が作成され、「注疏の学」から「四書の学」への転換が図られたのである。

（２）申請者は研究開始以前に、上海図書館所蔵の明・呉遷写本『金匱要略』三巻の画像を入手し、PC による解読作業を一部開始した。その結果、本書が従来その存在が知られていない宋版孤本、南宋・陳堯道撰『大学会要』『大学稿』『中庸五十義』『中庸会要』『中庸稿』の計五種を反故として筆写されたものであることを確認した。陳堯道については、『宋史』に伝は立てられておらず、他の史料によって、字は敬之、平湖（福建）の人、南宋・理宗の端平二年（1235）の進士で、著作として『中庸説』十三巻、『大学説』十一巻、『平湖集』があったことは判明しているが、その事績については未だ不明な点が多い。またこの紙背文献の存在については、すでに沈津氏によって指摘されてはいるものの、例えば注釈の種類について、沈氏は『中庸五十義』、『大学会要』の二種としているが、実際にはさらに『中庸会要』、『大学稿』、『中庸稿』の三種も存在しており、書誌学的検討及び内容の精密な解読は一切なされて無かったといえる。

(3) そもそも中国の近世以降の思想研究においては、古代思想分野とは違い「史料の発掘」による学説の転換はほぼ行われてこなかった。というのも既に亡佚した書物を復元するには、他書に引用されている文言を輯めて再編集するしか手段は無く、様々な理由により歴史から消え去った書物を復元するのはほぼ不可能というのが現状である（近年の研究においては程元敏氏などによる王安石注の復元が数少ない成功例だろう）。しかしこの貴重な書籍の画像を入手したことによって、士大夫の経書解釈の実際を明らかにすることが可能となり、本テーマを着想するに至った。

２．研究の目的

申請時、研究代表者は本研究の主要目的として次の二点を挙げた。

(1)北宋から元初にまでの士大夫の経書理解を、特に陳氏注が作成された南宋後期に焦点を当てて、考察していくことを第一の目的とする。五注の撰者、陳堯道が生きた南宋・理宗期（1224－64）は、朱熹及び朱子学に対する国家的尊崇体制の構築が本格的に開始され、「四書」の地位も格段に向上した時代である。そのような時期に作成された『大学』『中庸』の諸注を考証していくことは、朱子学の士大夫への伝播、浸透状況を明らかにする上でも重要な意味を持つと考えられる。また朱子学が、党禁から復権し、正統思想としての地位を獲得するまでの歴史的過程において、当時の士大夫が朱熹の著作、解注をどのように理解していたのかについても、陳氏の注を解読することにより明らかになると思われる。

(2)次に、歴史上突出した功績を持つ士大夫の思想を探るのではなく、当時大多数を占めた一般の士大夫の思想形成の実態を明らかにすることを第二の目的とする。そもそも従前の研究においてそれが行われてい

なかった最大の理由は、著者自身が政治的に高い地位を獲得する、もしくは思想家として「一家の言」を成さない限りは、その著述が亡佚してしまい、その思想を辿ることができなかったからである。研究者は従来未知であった宋版しかも紙背文献を、PCを用いた画像解析と実見によって解読・復元し、その思想史的意義を明らかにすることを目指し、それを成功させることは、現在研究分野の拡大と新たな研究方法の創出が強く求められている中国思想研究において、大変重要な意義を持つと確信する。

３．研究の方法

２で挙げた目的を達成するため、研究代表者は以下の方法を用いて、研究を推進した。

(1) PHOTOSHOP を用いた作業と上海図書館に赴いての実見によって、紙背文献である陳堯道『大学』『中庸』諸注を解読した。

(2) (1) の作業で解読した陳氏注を、朱熹の『大学章句』『中庸章句』及び『朱子語類』の関連部分と比較し、その異同を明らかにした。

(3) 陳氏注が中国近世思想史において如何なる価値を有するかをさらに明らかにするため、北宋後期から元代に至るまでの経書注釈書撰定および流伝に関わる記事を採集した。そのために『宋史』『続資治通鑑長編』『建炎以来繫年要録』『宋会要輯稿』『元史』などの史書は無論、蔵書目録、個人文集、年譜、筆記小説そして地方志などを幅広く検索、抽出していった。特に宋代は政治闘争がしばしば起こり、経書解釈においても解釈者の政治的、思想的立場が少なからず反映された側面があるため、可能な限り様々な史料にあたり、綿密なデータを集めた。

(4) (3) の成果を踏まえた上で、陳堯道およびその家系、また彼と交友関係にあった、あるいは敵対していた周辺の士大夫たちの事績を考証し、陳堯道の士大夫としての政治及び思想的立場を解明した。

(5) 陳氏注と地方学校教育および科挙との関係は、経書の伝播を考える上で無視できないものがある。現在日本における科挙に関する研究には相当な蓄積があり、最近は中国においても水準の高い研究が陸続と発表されている。本研究では、その成果を踏まえて、陳氏注が作成された目的を明らかにした。

４．研究成果

(1) ～2011 年度までの研究成果

①研究代表者は、2009 年上海図書館蔵『金匱要略方』画像データ（白黒・カラー）を入手し、PHOTOSHOP を使用しての解読作業を開始した。結果、紙背文献が従来言われていた 2 種ではなく、5 種であったこと、また諸注が、『四書集註』や『朱子語類』中の文章を適宜引用して再編集した、いわば資料集形式のものと、『大学』『中庸』朱氏注に対する陳堯道の見解を述べた、いわば講義録形式ものがあることが明らかとなった。

②その結果を踏まえて、2010 年、2011 年の 2 度、上海図書館にて実見し、結果、PHOTOSHOP では解析できなかった新たな注文および目録、序が部分的ではあるが残存していることが判明した。

③解読作業と同時に『宋史』などの史書は無論、蔵書目録、個人文集、年譜、筆記小説そして地方志などを幅広く検索・検討して、陳堯道の生涯を丹念に追っていった。その結果、陳堯道が、福建に道学を伝えた林光朝（1114～78）の三伝の弟子である劉克荘（1187～1269）と深い交流関係を持っていたこと、さらに陳堯道が劉克荘より優れた道学者として評価されていたことが明らかとなった。

④データ解析および実見の成果を、まず 2011 年、中国・江西・白鹿洞書院において開催された第 2 回朱子学国際学術シンポジウムで発表し、紙背文献の存在と学術的価値を、中国の朱子学者に広く知らしめた。

(2) 2012 年度の研究成果

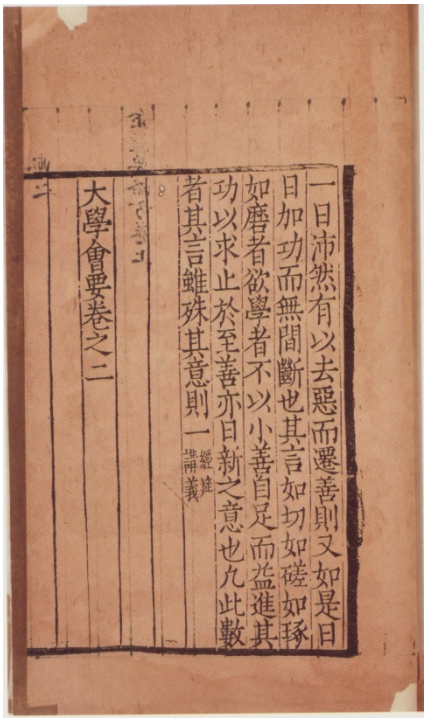
①福建および浙江の地方志を詳細に調査し、陳堯道一族の事績を追った。その結果、陳堯道の一族は、地方官僚のみならず、『周礼』、『礼記』、『易』などの注を作った学者としても功績があったことが判明した。

②五注および地方志の調査によって、陳堯道が『大学』『中庸』五注を作成した動機を解明した。五注の序には、陳堯道は 1247 年から 3 年間、南安軍(江西省贛州市大余県)軍学教授に就任し、その際学生の求めに応じて五注を作成した、と記されている。南安軍は北宋時代、周敦頤（1017～73）が程顥(1032～85)と程頤(1033~1107）に道学を伝えた地として知られ、南宋後期においても「天下は敢えて遠きを以て吾が学を軽んぜず」と称されるほど学術（朱子学）が盛んな土地であった。以上を踏まえて、陳堯道が五注を作成したのは、道学を信奉する学生の要請をきっかけであったという結論を導き出した。

③以上の成果を、大阪市立大学で開催された日本中国学会第 64 回大会および

中国・湖南省で開催された第 3 回朱子学国際学術シンポジウムで発表した。

④明・呉遷写本『金匱要略』三巻は、両面の歴史的価値が認められ、すでに「第三批国家珍貴古籍名録」（2010 年 6 月公布）に登録されていたが、2012 年 7 月 20 日～30 日、上海図書館で開催された「典冊琳瑯—慶賀上海図書館建館六十周年文展特展」に新発見の「貴重書」として展示された。その展覧会の図録『典冊琳瑯—上海図書館歴史文献典蔵図録』（上海古籍出版社、2012 年）には紙背文献一葉のカラー写真が掲載されている。（下参照）



紙背文献『大学会要』巻二書影

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（十一）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 14 号、165～172、2013、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/3567

② 井澤耕一、「南宋末期士大夫的『四書』解釈研究—通過解読上海図書館蔵『金匱要略方』的“紙背文献”」、『哲学与時代—朱子学国際学術研討会論文集』（華東師範大学出版社）、221～234、2012、査読無

③ 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（十）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 13 号、251～260、2012、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/3309

④ 井澤耕一、「『朱子語類』巻第八十六　礼三　周礼　地官 訳注」、『科研報告書『朱子語類』礼関係部分　訳注 4』、23～44、2012、査読無

⑤ 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（九）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 12 号、226～230、2012、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/3250

⑥ 井澤耕一、「南宋期における『周礼』学について—朱熹の『周礼』解釈を中心に」、『朱子家礼と東アジアの文化交渉』（汲古書院）、241～267、2012、査読無

⑦ 井澤耕一、「従南宋到明代初期的朱子学“官学化”」、『人文与価値—朱子学国際学術研討会暨朱子誕辰880周年紀念会論文集』（華東師範大学出版社）、133～145、2011、査読無

⑧ 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（八）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 11 号、171～178、2011、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/2687

⑨ 井澤耕一、「『朱子語類』巻第八十六　礼三　周礼　天官・地官 訳注」、『科研報告書『朱子語類』礼関係部分　訳注 3』、29～40、2011、査読無

⑩ 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（七）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 10 号、186～190、2011、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/2040

⑪ 井澤耕一、「劉師培『経学教科書』訳注（六）」、『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』第 9 号、172～176、2010、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/1591

⑫ 井澤耕一、「南宋期における『周礼』学について—朱熹の『周礼』解釈を中心に」、『国学研究』（韓国国学振興院）第 16 集、319～346、2010、査読無

〔学会発表〕（計 4 件）

① 井澤耕一、「南宋末期士大夫的『四書』解釈研究続論」、伝承与開拓—朱子学国際学術研討会、2012.10.25、湖南大学岳麓書院（中国）

② 井澤耕一、「南宋末、士大夫たちは「四書」を如何に読み解いたのか―上海図書館蔵『金匱要略方』の紙背文献に関する一考察―」、日本中国学会第64回大会、2012.10.7、大阪市立大学
③ 井澤耕一、「南宋末期士大夫的『四書』解釈研究―通過解読上海図書館蔵『金匱要略方』的“紙背文献”」、哲学与時代―朱子学国際学術研討会、2011.10.19、江西・白鹿洞書院（中国）
④ 井澤耕一、「従南宋到明代初期朱子学的“官学化”」、人文与価値―朱子学国際学術研討会　暨朱子誕辰880周年紀念会、2010.10.19、北京・西郊賓館（中国）

６．研究組織

(1)研究代表者
井澤　耕一（KOICHI IZAWA）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：00455908